

沖縄・名護支部

名護市長選挙

名護に女性リーダーを！ 私たちが決める

辺野古での新基地建設がすすむ沖縄県名護市。土砂投入強行という厳しい状況のもと、1月25日投票で名護市長選挙がおこなわれます。新婦人名護支部は、普天間基地の辺野古移設反対を掲げる「オール沖縄」の支援を受け立候補する翁長クミコさんとともに、基地依存から脱却し、子育てや福祉を最優先する名護市へと力を入れています。



クミコさんとともに「私たちのリーダーを」と宣伝する名護支部

市民の声を聞く市長に

「クミコさんを市長に」と最初に言い始めたのは私たちなんですよ」と話すのは、名護支部の井浦みづるさん。名護支部ができたのは2年前。「再来年は市長選挙。今の市長はぜんぜん市民と会話をしようと思わない。ちやんとここに住んでいる人の話を聞いてくれる人がいい」と、さまざまな場所に出向き、市民の声を聞いている翁長クミコさんの名前があがっていました。

市政の転換を訴えて

クミコさんは「生活者の視点」を重視し、15年に及ぶ市議時代には小中学校トイレの洋式化、公共施設に授乳やオムツ替えができる「赤ちゃん駅」の設置、生理の貧困対策などを実現してきました。

市民が主役の名護へ

支部は、「私たちが選んだ候補。全力で応援しなければ」と「名護に女性リーダーを誕生させる会」を結成。対話を広げようと横断幕を持って市場や団地、図書館の近くなどで宣伝しています。「市場での宣伝は参院選(昨年7月)のタカラさちかさんの応援の時から始めたもの。子どもたちが手を振ってくれるから元気が出る」と、この間の積み重ねも生かします。

市長選勝利を力に

市長選を前に、半年間停滞していた辺野古新基地建設の土砂投入が再開されました。住民に諦めを強いる政治的演出で、地方自治と民意を軽視する暴挙との批判が噴出。今回の選挙は名護市の未来を決めるだけでなく、9月予定の沖縄県知事選挙にも直結します。名護で女性たちが切り拓く新しい流れを全国から支え、後押ししよう。

戦の歴史を学び、明確な反対姿勢を固めたといえます。辺野古のゲート前で1年間、寝袋持参で泊まり込み、抗議活動に参加し、「寝袋議員」と呼ばれるようになった。

戦の歴史を学び、明確な反対姿勢を固めたといえます。辺野古のゲート前で1年間、寝袋持参で泊まり込み、抗議活動に参加し、「寝袋議員」と呼ばれるようになった。



【名護市長選挙カンパにご協力ください】
郵便振替 0015 0-7-74582新日
本婦人の会 ※と「沖縄支援」
明記

主張

戦争も核兵器もない平和で公正な世界へ大きな一歩をするす年に、願う、2026年を迎えました。しかし新年早々、トランプ米政権によるベネズエラ侵略、66の国際機関からの脱退、グリーンランド併合への軍事威嚇など驚くニュースばかりです。しかも高市政権が、国際法や国連憲章違反の米國に抗議もしないことは許されません。

平和とジェンダー平等社会へ 声と行動で地域から迫る年に

まででない危機感です。SNSを通じて入会も続いています。1月23日からの通常国会では、来年度の予算審議が始まります。新婦人は2月6日、出足早く、「9兆円の軍事費ではなく、くらし・

女性たちは集まって、しゃべって、元気になる。3月6〜8日にはジェンダー平等をめぐり、「女性の休日」一斉アクション、原爆の絵展をさらに地域から広げ、戦争への不穏な動きに仲間とともに機敏に声をあげ、会員を大きく増やす一年にしていきたいと思います。

元中央委員 我妻紀恵子さん死去
新日本婦人の会元中央委員の我妻紀恵子(わがつまきよこ)さんが、12月20日に死去しました。85歳でした。我妻さんは、山形県本郷事務所長、会長を歴任。1980年〜92年まで中央委員を務めました。

<月1回>

「ふつう」を問い直す

社会の縮図の学校で



ジェンダー教育実践家
星野俊樹

学校では、「子どもを一人の人間として見る」ことが教育の基本だと繰り返し語られます。性別にこだわらず、その子自身の個性を尊重しようとする姿勢は、公正な教育をめざすうえで大切です。特に、性的マイノリティーの子どもたちにとって、「女の子」「男の子」という枠に押し込まれない視点は、大きな支えになります。

学校は、人を「女か男か」に分ける考え方や、「恋愛や結婚は異性同士」という前提が、当たり前のように存在する場所だからです。「性別にこだわらない」視点は、そうした息苦しさから子どもを守る力をもっています。一方で、「性別は関係ない」という立場を一貫してとりつづけることには、別の危うさもあります。学校には、すでにジェンダーによる不平等が組み込まれているからです。たとえば、教室で男子がよく発言し、女子が空気を読んで静かにしている場面。これを「性格の違い」や「それぞれの個性」で片づけてしまうことは簡単です。しかし、教育やジェンダーの研究では、こうした状況を「男子の雄弁、女子の沈黙」と呼んできました。これは、男子が生まれつきおし

4 「性別にこだわらない」ことが平等?

やべりで、女子がもともとおとなしい、という意味ではありません。教師が女子にも発言の機会を与えようと努力していても、男子は自己主張をともなう発言を繰り返す、女子は目立たないようにふるまう態度を身につけていく。その結果、男子は言動を絶えず発し、女子は目立たないような態度をとりつづけるという集団のあり方が、無意識のうちにつくられていきます。男子の発言は「積極的」と評価されやすく、女子の発言は「出しゃばり」と受け取られてしまう。こうした評価の差が積み重なることで、沈黙は身を守るために学習されたふるまいになります。それ



(本文とは関係ありません)

でも「性別にとらわれない」見方だけをしていると、この沈黙は本人の選択や性格の問題にすり替えられてしまいます。性別にこだわらないことは、ときに不平等を見えなくします。平等を本気で考えるなら、「見ない」ことではなく、「気づく」こと。そのためには、あえて性別に目を向ける視点が必要ではないでしょうか。